

# Shine

自殺大国を生き抜くパブリック空間の提案

横山ゼミ 本宮陽向

あなたは、死にたいと思っただことはありますか？

日本は年間2万人以上の方が自殺により命を落とす世界的に自殺率の高い  
「自殺大国」と呼ばれる国。



通勤・通学ラッシュの時間に直撃する人身事故や有名人の自殺報道、自殺防止のポスター、  
当たり前のように日常の中に紛れ込む「自殺」という存在に私は違和感を感じていた。

# なぜ日本は生きにくいのか？



現代日本の生きにくさの原因は**都市環境と建築の分離**、

それによる人々の**居場所の減少**によるものではないか。

現代都市はそれぞれの環境が「建築」という「箱」によって独立し

「街」という「空間」から隔離されているように見える。

効率性を重視し、コンクリートとガラスで囲われ区別された環境は本当に人々にとって生きやすいのか？

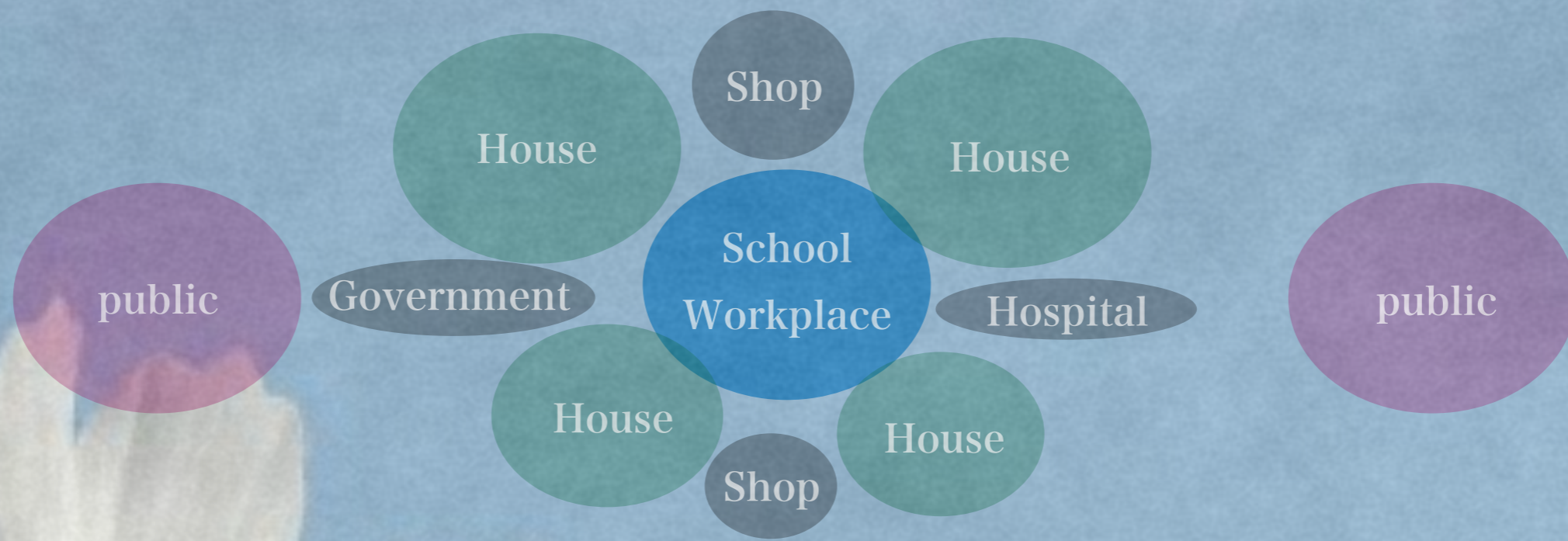
パブリック空間のあり方を見直す



窮屈な日常に新しい居場所の提供

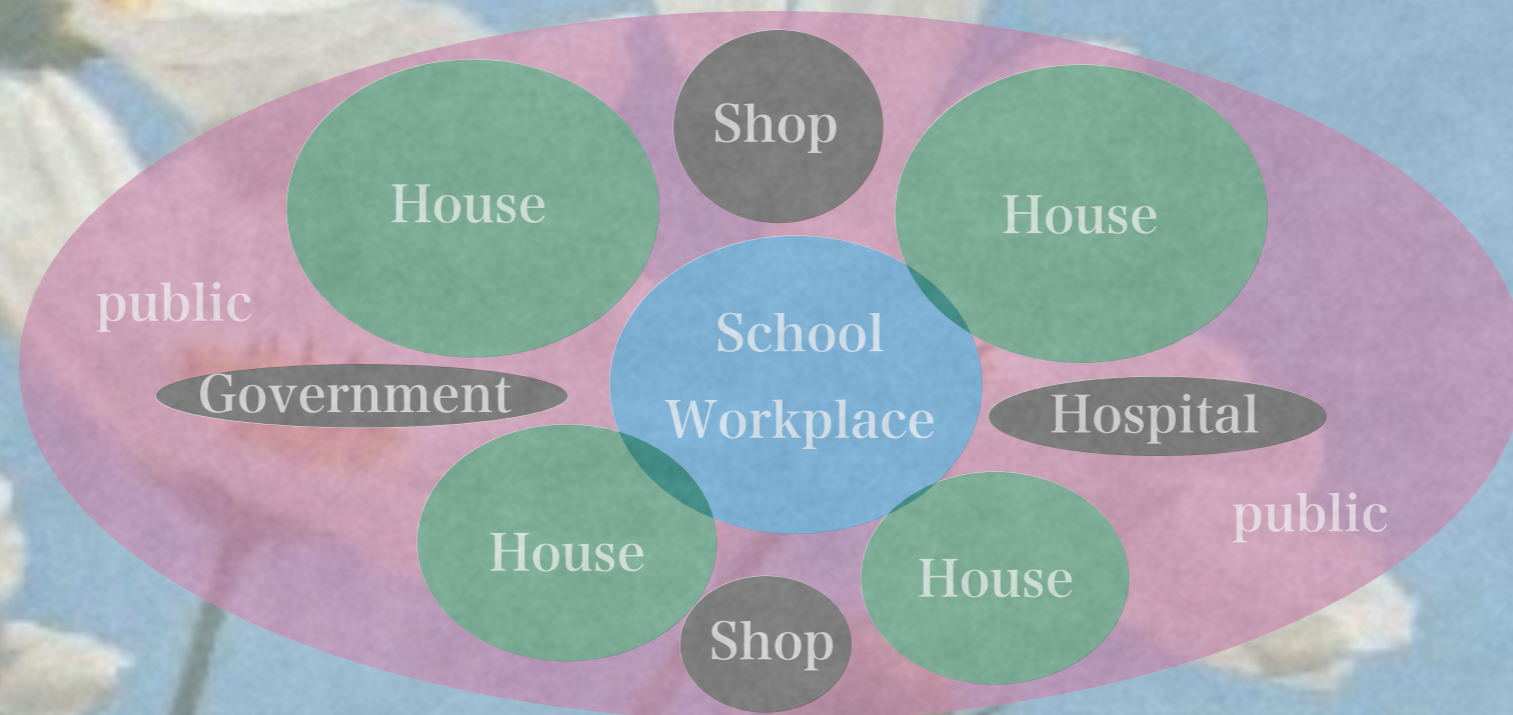
誰のものでもない空間を生活の中に取り組む事で人々へ平等に居場所の提供が可能に。

# 現状



現代の街の構成としてパブリック空間に対する関心は低く生活の中に取り込まれている  
とは言い難く、明確な目的がないと足を運ぶ候補になっていない。

# 提案



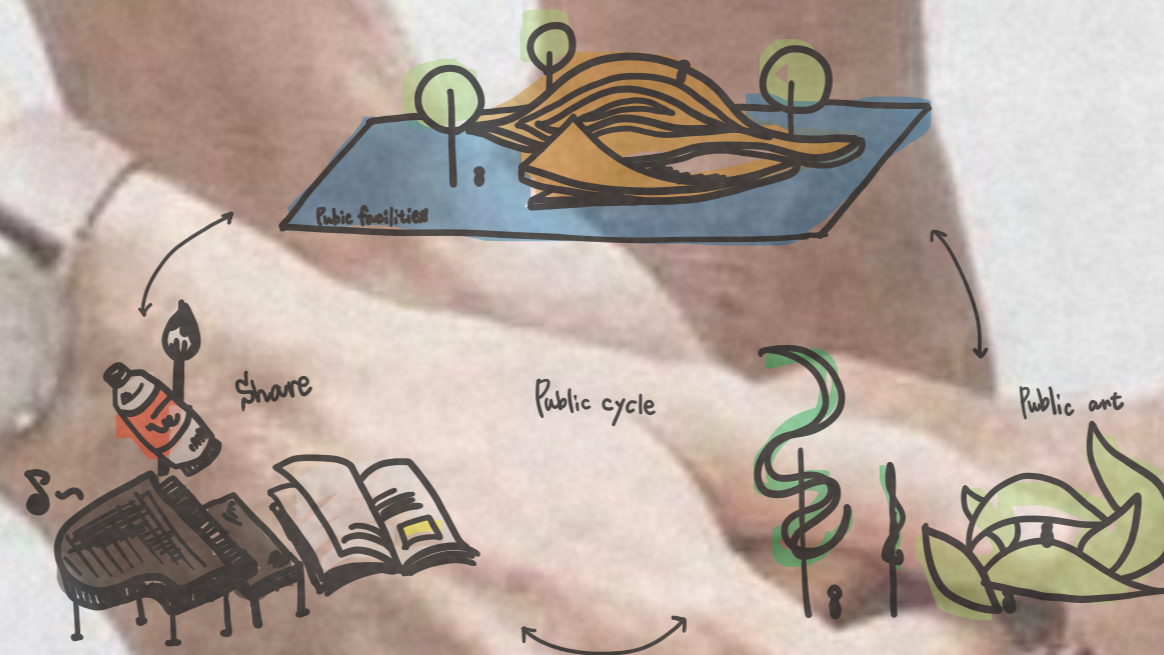
職場や学校、生活機関をパブリック空間が包み込むような構成。  
こうすることで箱と箱の間で生きてきた環境に新しい「間」が生まれる。

# Image Photo



# 「3つのパブリックサイクル」という提案

「公共施設的设计」をメインに「誰でも自由に利用できるシェア体験」  
「日常に溶け込むパブリックアート」を取り入れた3つのパブリックサイクルを行う。



パブリック空間が日常を包む



他人との共有意識  
(シェアの概念) が芽生える



心身の孤立を回避



この3つのサイクルを行う事で人々の心に「シェアの概念」を生み出し自殺の主な原因である心身の孤立を解消する。



▼区の木である桜も植えられており

昆虫や動物も見つかった。



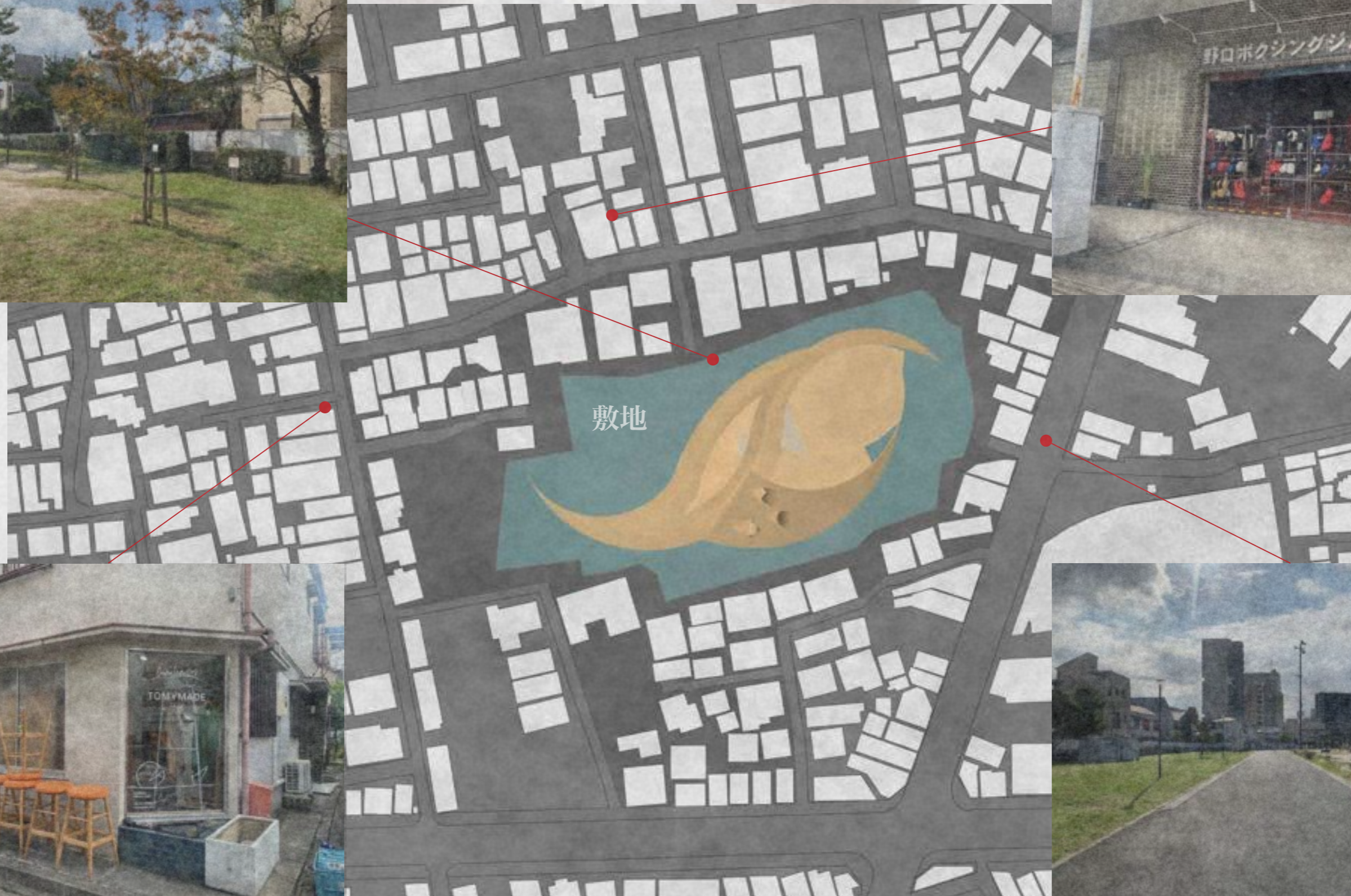
▼野口ボクシングジム

住宅街の中に紛れるように建つ。アップテンポの曲が流れていた。



### 【想定敷地】

〒120-0042 東京都足立区千住龍田9



▲レザー専門店 TOMY MADE

革製品の洋服やバック、家具等を取り扱っている専門店。



▲日当たりがよく広々した敷地

人通りも多く賑やか。子供達の遊び場になっている。

## 【制作意図】

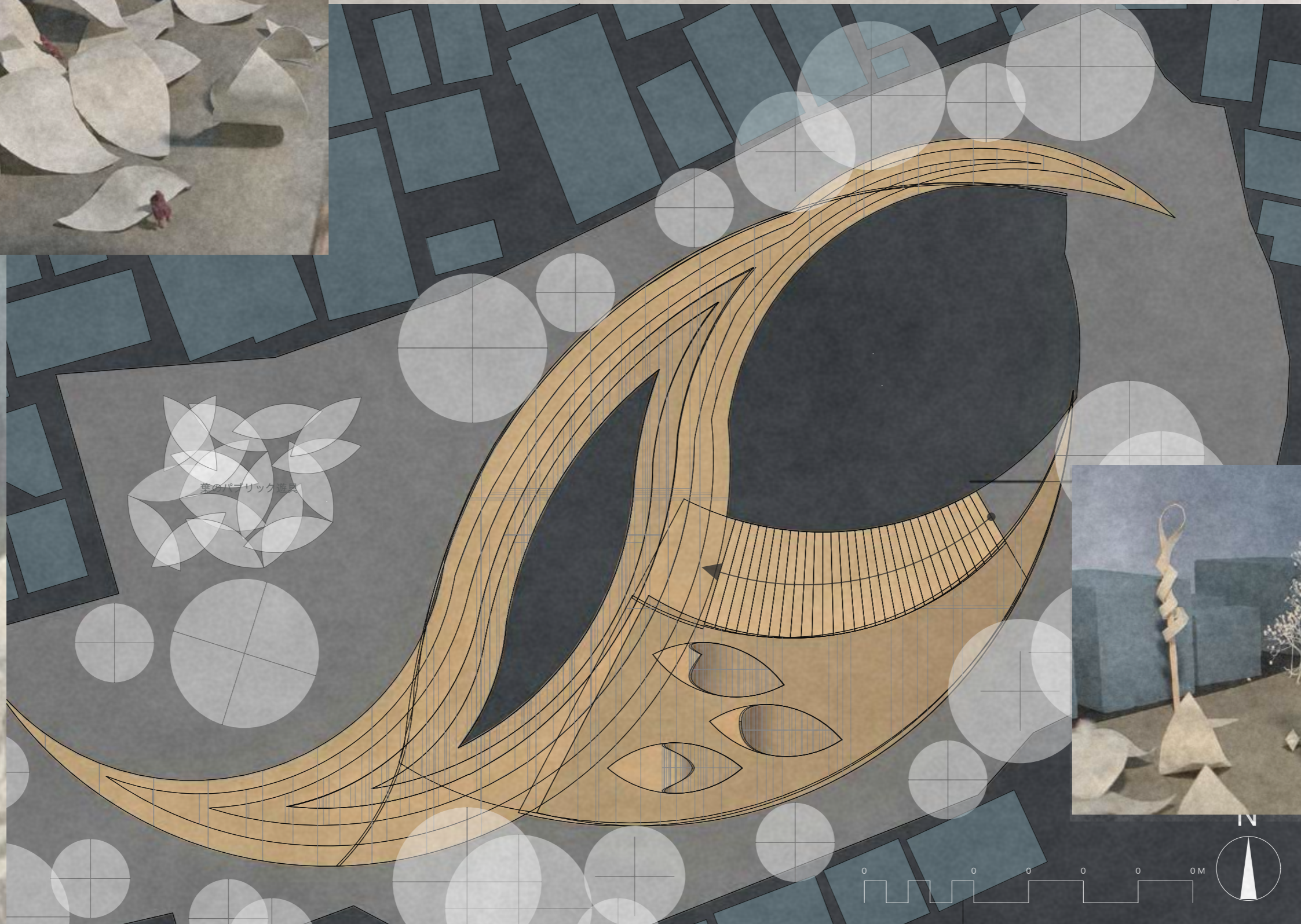
「木の葉」として生きていた葉は、地面に舞い降り「落ち葉」という存在で大地と一体となり、生命の新たな居場所をつくる。その姿はどこか人間的であり建築的であると共に強い生命力を感じる。

そこで「自殺大国」と呼ばれる日本で人の心に寄り添う新しい居場所づくりのために、その落ち葉と大地の姿を建築に落とし込んだ。



# 風を見る風車

▼配置図兼屋上平面図 (S=1/300)



# 葉の遊具

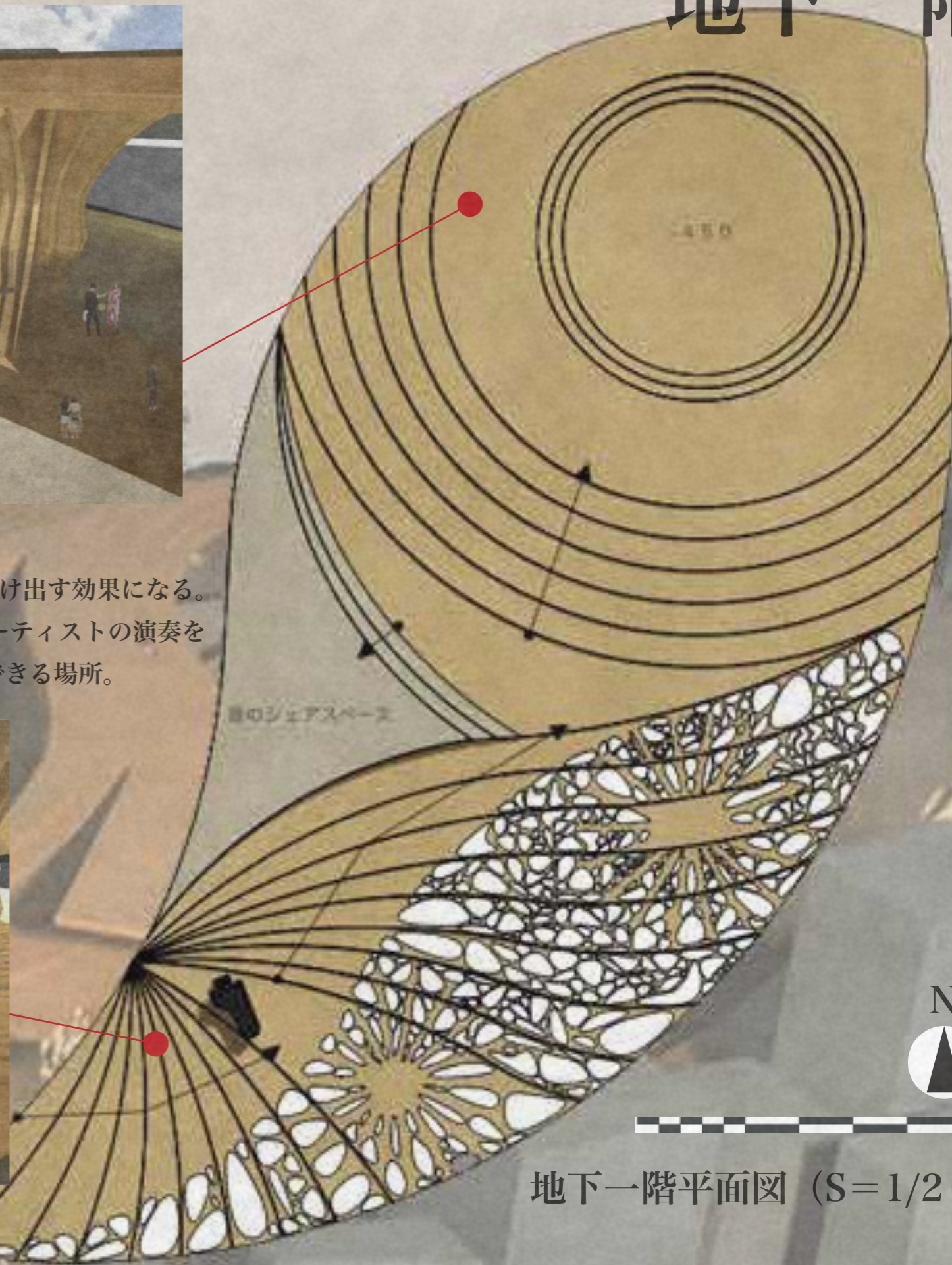
敷地内にはメイン施設を中央に配置し、周囲には足立区の木である桜の木だけでなく葉の遊具や風を見る風車などパブリックアートを多く配置。

# 音のシェアスペース

## 地下一階



「みんなで同じ音を聴く」という行為は利用者にとって静寂による孤独感から抜け出す効果になる。  
AとBのステージがあり、Aは時間ごとにスケジューリングされた様々なアーティストの演奏を披露するステージ、Bにはピアノを設置し利用者が自由に使うことができる場所。

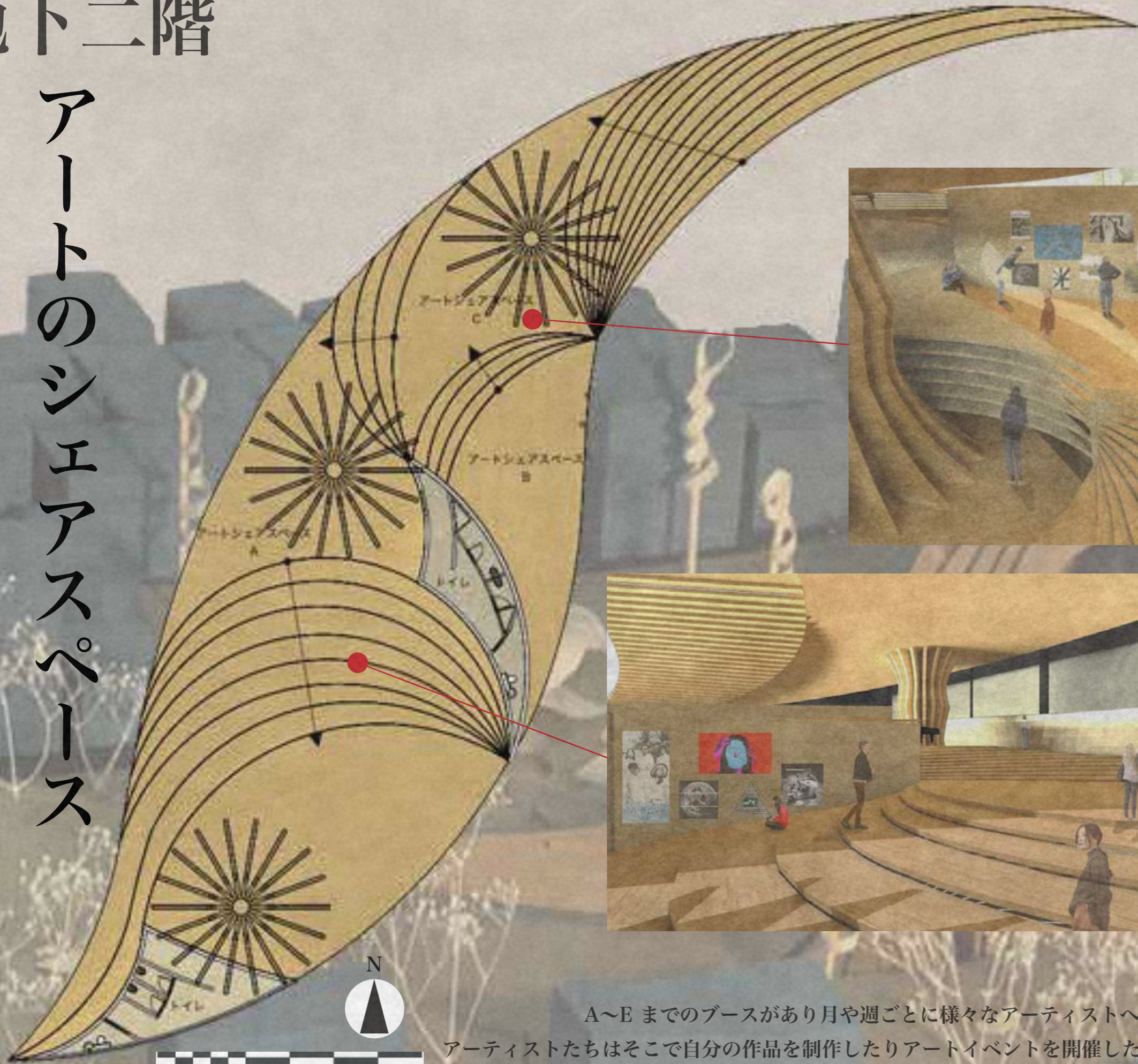


地下一階平面図 (S=1/200)

「みんなで同じ音を聴く」という行為は利用者にとって静寂による孤独感から抜け出す効果が期待できる。

# 地下二階

## アートのシェアスペース

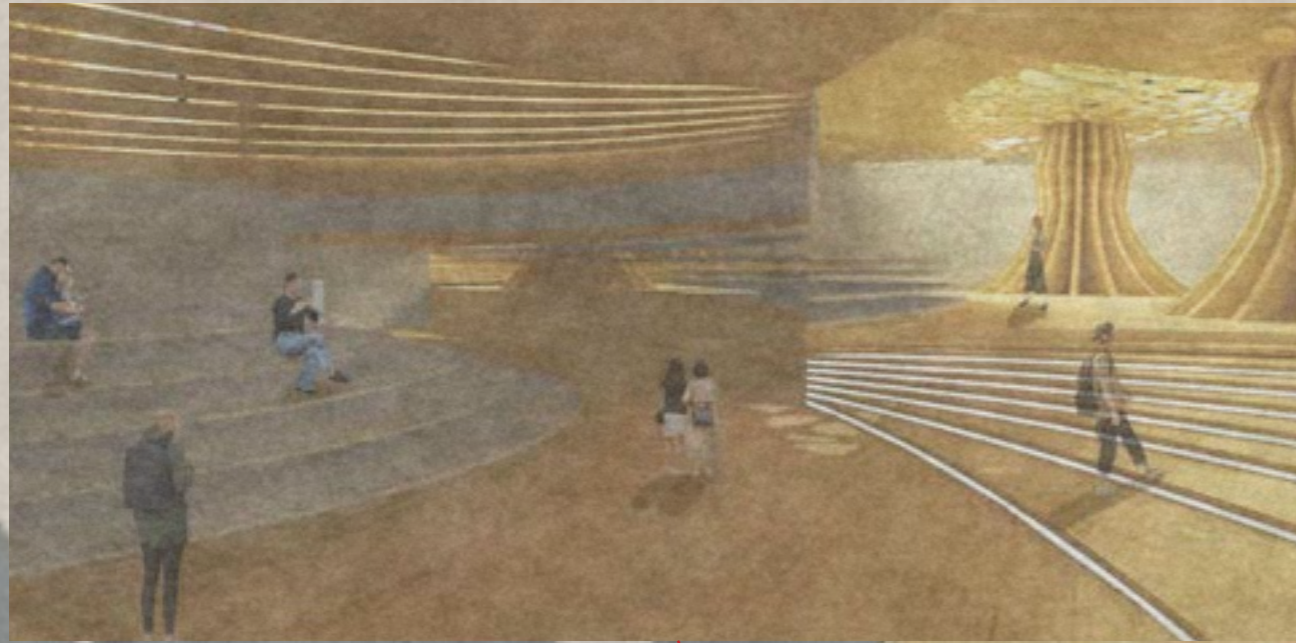


A~E までのブースがあり月や週ごとに様々なアーティストへその場所を貸し出すシステム。  
アーティストたちはそこで自分の作品を制作したりアートイベントを開催したり個展での展示会場としての使い方もできる。

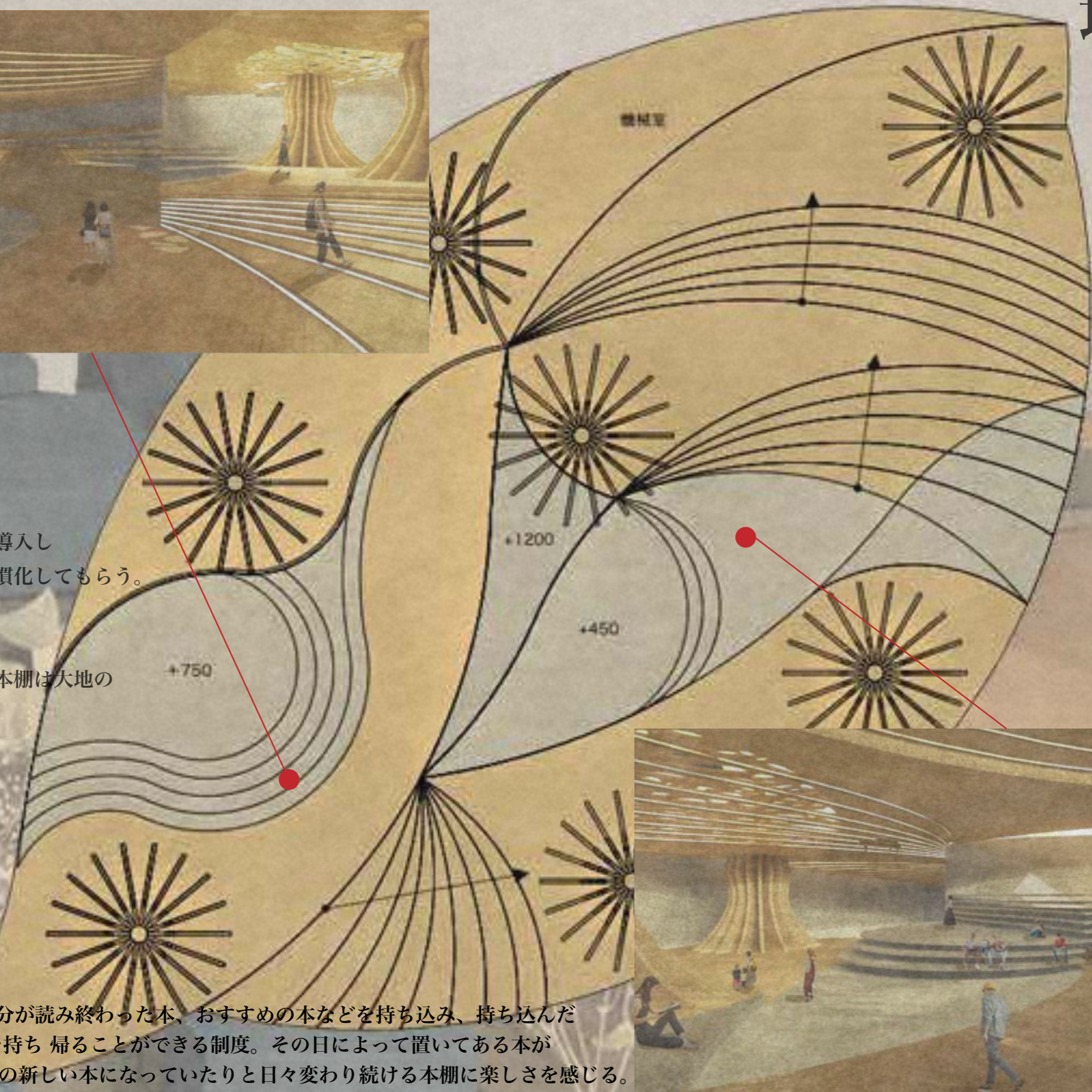
地下二階平面図 (S=1/200)

# 地下三階

## 本のシェアスペース



「フリーブック制度(※1)」を導入し  
新たな本の出会いや来場を習慣化してもらう。  
空間は「大地を感じる空間」。  
木の柱から伸びるたくさんの  
木の根タイル、所々に設ける本棚は大地の  
重厚感を感じられるように  
まるで大地がそのまま盛り  
上がったような空間に。



(※1) フリーブック制度 自分が読み終わった本、おすすめの本などを持ち込み、持ち込んだ分だけ他の気になる本を持ち 帰ることができる制度。その日によって置いてある本が違ったり、自分の置いた本が誰かの新しい本になっていたり日々変わり続ける本棚に楽しさを感じる。



Shine

目を閉じてても誰かの足音や声が聞こえ、何をしているかがわかる。  
誰の所有物でもないからこそ感じる居心地の良さがあるのではないか。

孤独に押し潰されそうになった時、  
心のシェルターとして人々の心を明るく照らす **Shine** (輝き)  
になるようなパブリック空間を目指している。